

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 5 日現在

機関番号：21101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370253

研究課題名(和文) 『長崎そのときの被爆少女』成立過程確定を軸とした長崎原爆文学に関する基盤的研究

研究課題名(英文) A study on the Atomic-bomb literature in Nagasaki by revealing the established process of "Masako Does Not Give Up" with empirical approach

研究代表者

横手 一彦 (YOKOTE, Kazuhiko)

青森公立大学・経営経済学部・教授

研究者番号：60240199

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：『長崎そのときの被爆少女』(時事通信出版局発行、2010年、『雅子斃れず』改訂版)は、長崎原爆を個人の被爆体験として文字化した作品である。日本は、1945年8月から1952年4月まで、GHQ/SCAP(General Headquarters/Supreme Commander for the Allied Powers)に軍事占領された。被占領下や敗戦期の困難を乗り越え、文学作品として出版された一例である。本研究は、新しい関連資料を求め、実証的な研究をおこなった。そして、意外の進展を得た。それらを、私家版の形にまとめ、公開した。

研究成果の概要(英文)：This study illuminates a Japan modern novel which described people in Nagasaki City destroyed by the Atomic-Bomb in the World War . It is a case study of Ishida Masako (1931 -)'s work "Nagasaki - Sonotoki no Hibaku Shojo" ("Masako Does Not Give Up", JiJi Press Publication Service,2010, revised edition of "Masako Taorezu"). This work shows in the established process of the kind of literature under GHQ/SCAP censorship policy. Japan was under military occupation by the Allied Powers from August 1945 to April 1952. From the viewpoint of defeat period literature or literature under military occupation in Japan, I have devoted myself to discover new materials through researching documents and tried to accumulate study results with empirical approach. In the process to drawing up the study plan, unexpected findings were obtained. These are reported in the "Privately Printed Books".

研究分野：人文学

キーワード：長崎原爆文学 『長崎・そのときの被爆少女』 『雅子斃れず』 石田壽 石田穰一 石田雅子 石田道雄 GHQ/SCAP検閲

1. 研究開始当初の背景

本研究以前、平成 20 年度(2008)から 24 年度(2012)科学研究費基盤研究(C)「GHQ/SCAP 関連資料を基軸とした戦後文学成立期に関する実証的研究」(課題番号 20520196・担当者)の研究項目の一つに、「GHQ/SCAP 検閲個人所蔵資料発掘及び公表」と記し、このことに努めた。平成 25 年度(2013)から 28 年度(2016)科学研究費基盤研究(C)「『長崎そのときの被爆少女』成立過程確定を軸とした長崎原爆に関する基盤的研究」(最終年度前他課題応募採択)は、本研究以前の科研課題のなかで得た知見や成果を基に、その一部を発展させて、新たに研究計画を立案したものである。「研究成果」の項目に、本研究課題を遂行する過程で、意想外の進展があったことを具体的に記した。これらが、前課題を部分的に引き継ぐ本研究を特徴付ける。

本研究以前のこととして、研究開始当初の背景となった二つのことを記す。その一つは、長崎市在住カメラマンから、勤務校の講義用参考資料になればと、一〇〇点余りの被ばく後の画像を提供されたことである。講義資料として活用し、また画像資料の有意性を、一つの企画案として出版社に提示した。幾度かの交渉を経て、編著『長崎 旧浦上天主堂 1945-58—失われた被爆遺産』(岩波書店、2010 年)を纏めた。また「幻の世界遺産」と題し、二〇〇九年七月長崎市ナガサキピースミュージアム(同企画実施責任者)や二〇一〇年九月東京都中央区銀座長崎センタービルギャラリー(主催長崎放送 後援長崎県・長崎市・長崎新聞・岩波書店)で写真展を開催した。

その二つは、編著『長崎・あのときの被爆少女 六五年目の『雅子斃れず』』(時事通信出版局、2010 年、改訂版『雅子斃れず』、実兄石田穰一による新書名)を纏めたことである。これは、長崎県立図書館所蔵資料を確認する過程で、図書寄贈者「柳川雅子」を知

り、旧姓石田雅子の所在地を各所に問い合わせた。作品の成立事情を追跡し、プランゲ文庫版『雅子斃れず』を確認し、初出の文体で刊行した。研究主导者が編著に携わった石田(現姓柳川)雅子『長崎・そのときの被爆少女

六五年目の『雅子斃れず』』は、2010 年前後の段階において、新たに確認された関連資料や新資料(GHQ/SCAP 検閲等)や、研究の進展を反映したものである。

この後に、長崎(浦上)原爆を最初に描いた文学作品「雅子斃れず」の直筆原稿を含む、段ボール一箱分の未公開資料の所在が確認された。当該資料は、その存在は確認されていた。しかし、所在が長く不明であった。このような経緯を踏まえて、個人が所蔵する当該資料を整理し、書誌的調査を行う必要があると考えた。当該資料を分析し、その実証性に裏付けられた論究も行われるべきと考えた。このことに付随し、米議会図書館やメリーランド大学プランゲ文庫等の資料の追確認にも努めるべきと考えた。個人宅で確認された当該資料には、多数の GHQ/SCAP 英和文資料が含まれていた。米軍の占領下で、被占領民の側が、合法的範囲内で全面的に言語制度に拮抗し、出版に至った希有な作品事例である。私見の限り、日本側資料と GHQ/SCAP 検閲資料の双方向の一括保管は唯一のことであり、貴重であった。分散的ではなく、冊子形態として纏めて記録し、公開することは、現世の世代が後世へ果たすべき役割と考えた。このことに史的な意義を見いだした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、長崎という地域性、GHQ/SCAP 言語政策と文学作品の規則的な関係性、この時期の表現の特徴(言葉の在り方)、GHQ/SCAP 検閲との具体的な関連性、『長崎・そのときの被爆少女』の原典研究、段ボール一箱分の未公開資料の書誌的整理と公表(無償配布)、他の GHQ/SCAP 関連資料の発掘などによって達成されると考えた。その過程で、

類似の未開拓領域を知り、強い関連性があると推断することが出来た。当該課題の最終年度前の新規課題に応募し、採択された。このため研究計画作成時に想定した到達点に達し得なかった項目がある。例えば研究4年目に GHQ/SCAP 検閲の原典調査のため、短期渡米調査を計画していたが、なし得なかった。よって、この項目の進展が十分ではなかった。

3. 研究の方法

1. 最初の長崎(浦上)原爆文学作品『長崎・そのときの被爆少女』に関する、個人所蔵の未公開資料を書誌的に整理する。この段ボール一箱分の未公開資料は貴重であり、本研究の独自性を構成する一つの柱である。

2. 被ばく直後の長崎浦上教会コミュニティ誌(実質的な地域誌)『荒野』は、被ばく中心地の地域住民が、直後の惨状と生活再建を、人間の記録として、最も早く文字化したものである。欠号などの不備があり、この探書を継続し、その後に書誌的整理を行う。

3. 米国メリーランド大学ブランゲ文庫が所蔵する検閲原典資料との対応関係を確認する。このことで、GHQ/SCAP の言語政策と文学作品との規則的な関わりを論究する。

4. 当該研究の進展(主に雑誌検閲)を踏まえ、同文庫書籍検閲資料に拠って、削除本文復元等の事例研究を行う。

5. 基本的整序を踏まえた通史的な長崎(浦上)原爆文学の試論を立論する。

6. 聞き書き調査などによって、先行世代の経験則に学ぶ。

4. 研究成果

新たに所在が確認された段ボール一箱分の未公開資料の書誌的な整理を行うため、石田壽の著作権を継承する三氏(研究協力者)から、資料利用に関する許諾を得た。研究成果の部分的な公開を前提として、この原資料を借用した。この経緯は、『長崎・そのときの被爆少女』原典研究などを通じて、本研究

の必要性を理解して頂いた一端のことと考える。本研究の前段階として、このことは必須のことであった。研究計画は、この信頼関係の上に成り立った。研究方法は、提供される原資料に左右される。また、新資料や関連資料を部分的に公開する許しを得ることで、本研究の有意性が確保される。『長崎・そのときの被爆少女』は、当該課題の典型的事例と位置付けることが出来る作品である。この書誌的研究と関連資料から、長崎(浦上)原爆を新たな角度から焦点化することで、本研究の有用性が見いだされる。当該課題は、長崎という歴史的な地域性(特に浦上地区)を視野に入れ、米国メリーランド大学ブランゲ文庫の文献調査などから、GHQ/SCAP の言語政策(GHQ/SCAP 検閲など)と文学作品の関わりを考察し、この時期の表現(言葉の在り方)の特徴を抽出することを試行した。

本研究を、平成 25 年度(2013)は研究の基礎的要件の確立期、平成 26 年度(2014)と 27 年度(2015)は研究進展と具体的成果の獲得期、平成 28 年度(2016)は短期渡米調査と研究成果の集約と補訂の時期と区分けた。以下、研究成果を列記する。

1. 長崎(浦上)原爆を描いた林京子や石田(現姓柳川)雅子の作品は、広く知られている。戦時期に二人と長崎高等女学校同期であり、同じ長崎三菱兵器大橋工場に学徒動員され、被ばくした立川裕子と安日涼子と樋口恵子の聞き書き調査を行った。これらは、被ばく体験と被ばく直後に運行された臨時救援列車に乗車した実体験を軸とした記録である。同列車内の出来事や細部を記録し、事実経過を明確にすることに努めた。1945年8月9日の午後から夜にかけての臨時救援列車の運行は、広島原爆の場合にはなかった救出・救援活動であった。この活動は、急遽機関車乗務員と長崎市近郊停車駅の駅員が合議し、このことに拠った咄嗟の行動であった。原爆が投下され、被ばくしたその直後から、計4本

の臨時救援列車が運行された。この救出・救援活動によって、長崎市内北部・本大橋以北2500名(一説に3500名)ほどの被ばく者が、長崎市郊外や隣接する市町村に搬送された。大仰な物言いになるが、このことは人類史的な行為であったと考える(私家版第一集所収・後述)。同時代証言と文献資料と事後資料から、この前後の出来事を、部分的であるが可能な限り、明確にすることに努めた。

2. 林京子と石田雅子の許諾を得て、臨時救援列車が運行された前後の作品本文を再録し、このことで被ばく直後の状況を明確にすることに努めた(私家版第一集所収)。

3. 拙稿「被ばく時の臨時救援列車の運行人が極限の破壊に生きること・根源的な人間らしさ」(私家版第一集所収)。

4. 石田壽(1895-1962・ひさし)は、被ばく時、長崎地方裁判所長の職にあり、被ばく直後から長崎市の復興のために、多面的な活動を行った(例・爆心地近くに祈念像建立の発案・長崎ユネスコ創設・早川雪洲の長崎口ケ支援など)。その後、京都地方裁判所に異動した。1951年6月26日、京都地方裁判所で録音された被ばく証言の音源が、個人宅で発見された。この音源は、本来、裁判法廷における証人喚問の代替機能を最新機器に求め、試作品の録音機材の試用を目的としたものであった。裁判所内部の研修を兼ね、機器の機能を現場で確認する実用的な側面を持つ、このような被ばく体験の語りであった。この時の石田壽「原爆物語」は、ごく初期の被ばく証言であり、被ばく体験が録音された最初であった。その録音テープは、セルロイド製ではなく、細い紙片を継ぎ合わせ、その上に磁気を塗布した用材であった(英文社名Soni(ママ)・東京通信工業株式会社・現ソニー)。現在市販されている音響機器では、これを再生することが出来ず、既にテープの継ぎ目を補修する用具は市販されていなかった。地方放送局の現場社員の助言や助力を得

て、これを再生することが出来た。この音声掘り起こし、文字記録とした(私家版第二集所収・後述)。

5. 同時代紙(誌)に、関連する記事を確認、石田雅子『雅子斃れず』以外の関連記述を収載した(私家版第二集所収)。

6. 拙稿「成立の背景など」「この作品について」「解題」(私家版第二集所収)。他方、在米のGHQ/CSAP 検閲資料の原典調査が出来ず、削除本文を復元する作業などを十分になし得なかった。また雑誌『荒野』の欠号を埋める作業を完了することが出来なかった。この未到達点は、当該研究の幅を広げるなかで、次段階の課題として引く継ぐ。

7. 私家版集に、『長崎・そのときの被爆少女』の前著『雅子斃れず』(ほぼ同一作品)の直筆原稿(個人所蔵資料)を収載することが出来なかった。この直筆原稿は、被ばくから二ヶ月ほど経った病床で記され、長崎(浦上)原爆文学の嚆矢となったともいえる作品原稿である。私家版集の第二まで刊行し、第三に許諾を得て、直筆原稿を部分再録する予定であったが、最終年度前に他課題に応募し、採択されたため、これをなし得なかった。このことに関連し、また敗戦期の長崎に関連する画像資料(個人所蔵関連資料)を収載することが出来なかった。書誌的整理を終えた成果も収載することが出来なかった(個人所蔵資料)。結果的に、部分的な、その意味で不十分な資料集の刊行となった。限定的であるが、冊子形態(私家版)で一括し、研究の目的との整合性を持った系統性を保持し、関連資料などをまとめて公開することで、一区切りとした。そして、主要な図書館等や長崎県内の施設等や関係者や関心を寄せる個人に、各年度において、第二までの私家版集を無償配布(非売品・送料実費)した。

8. これらの研究成果を基に、文学展や企画展を提案し、遺族や関係者の協力や助力を得て実施した。その一つは、平成26年(2014)7

月 8 日から 8 月 30 日の間、長崎県立長崎図書館の主催による「原爆文学展」の企画立案である。この開催に協力し、研究のために一時借用していた個人所蔵資料の一部を、許諾を得て、同図書館 4 階郷土資料展示室に展示した。

9. その二つは、上記と同じ期間に、同じ長崎県立図書館の主催による企画展「石田壽と長崎」の企画立案したことである。この開催に協力し、許諾を得て、個人所蔵の関連資料を借用し、同図書館 2 階ロビー展示場に一部を展示した。この時、新たに発見された被ばく証言の録音テープの現品を展示した。付記 これまでの研究や調査活動を通じ、また本研究課題に直接的に関連し、当該研究を引き継ぎ、発展させるものとして、次の研究課題を位置付けた。この新規採択の研究課題に、これまでの研究成果等を反映させる。平成 28 年度(2017)から 31 年度(2020)基盤研究(C)「旧日本映画社撮影長崎原爆映像の超高度精密化と関連資料等による歴史的記録性の確立」(課題番号 16K02429・主担者)。

5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線) 〔雑誌論文〕(計 4 件)

横手一彦「被ばく後を生きる 長崎浦上・死の谷の記録など」2013 年 7 月『社会文学』第 38 号 日本社会文学会発行 p38~p48 査読有

横手一彦「米国メリーランド大学プランゲ文庫所蔵資料に学ぶ」2014 年 3 月『戦後教育史研究』第 27 号 明星大学戦後教育史研究センター発行 p29~p33 査読有
私家版第一集『長崎(浦上)原爆体験の記録 被ばく直後に運行された臨時救援列車』全 63 頁 編著者横手一彦 2014 年 6 月 長崎総合科学大学共通教育部門横手研究室(前任校)発行 査読無

私家版第二集『長崎(浦上)原爆体験の記録 石田壽「原爆物語」など』全 83 頁 編著者横手一彦 2015 年 6 月 長崎総合科学大学共通教育部門横手研究室(前任校)

発行 査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

横手一彦「六九年目の『長崎・そのときの被爆少女 『雅子斃れず』 新資料などを紹介しながら」長崎県立図書館主催 於・長崎県立図書館講堂 2014 年 7 月 26 日

横手一彦「『長崎・そのときの被爆少女 『雅子斃れず』のことなど」長崎県文芸家協会主催 於・長崎ブリックホール国際会議場 2014 年 11 月 9 日

横手一彦「被ばくと被ばく後を考え直す」長崎原爆の戦後史をのこす会 於・長崎市中央公民館 2015 年 6 月 26 日

〔図書〕(計 1 件)

横手一彦「長崎と軍隊 長崎(浦上)原爆と臨時救援列車」2015 年 1 月『地域のなかの軍隊』第 6 巻所収 吉川弘文館発行 p140~p149 査読有

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 横手一彦
(YOKOTE Kazuhiko)
青森公立大学・経営経済学部・教授
研究者番号：60240199

(2)研究協力者

石田穰一(ISHIDA Joichi)
柳川雅子(YANAGAWA Masako)
石田道雄(ISHIDA Michio)